異体同心事

異体同心なれば、万事を成じ、同体異心なれば諸事叶ふ事なしと申す事は外典三千余巻に定まりて候（中略）日本国の人々は多人なれども、同体異心なれば、諸事成ぜん事かたし。日蓮が一類は異体同心なれば、人々すくなく候へども大事を成じて、一定法華経ひろまりなんと覚へ候。悪は多けれども一善にかつ事なし。　（御書１３８９頁）

【通釈】

異体同心であればあらゆることを成就でき、同体異心であれば何事も叶えることはできない。これは外典三千余巻に定まっているのである。

日本国の人々は多人数であるが、同体異心なので何事も成ずることは難しい。日蓮の一類は異体同心であるから、たとえ人が少なくても大事を成就して、必ず法華経（三大秘法の正法）が弘まるであろう、と確信する。悪はどんなに多くとも一善に勝つことはできないのである。

【主な語句の解説】

①異体同心
→身体は異なっていても、心を一つにして力を合わせること。
②同体異心
→身体は同じようであっても、心や考え方に異なりがあること。また、同じ集団にいながら心はばらばらであること。
③外典三千余巻
→仏教以外の数多くの経書。
④一善
→日蓮大聖人の説かれた正法（三大秘法）のこと。

【背景と大意】

本抄は、本門戒壇の大御本尊を顕される二カ月前の弘安二年（１２７９）８月、日蓮大聖人５８歳の御時、身延より駿河国富士上野（現在の総本山一帯）の地頭であった南条七郎次郎時光殿に宛てたお手紙です。

内容は、はじめに時光殿からの小袖や銭などの御供養に対する御礼を述べられ、次に熱原の法華講衆が頻発する法難を乗り越えるには異体同心の信心が必要であるとされます。さらに、世にはびこる謗法も正法には勝てないことを述べられ、最後に時光殿のこれまでの御奉公を称賛して結びとされています。

【参考御書並御指南】

『生死一大事血脈抄』
「日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく、水魚の思ひを成して異体同心にして南無妙法蓮華経と唱へ奉る処を、生死一大事の血脈とは云ふなり。然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり。若し然らば広宣流布の大願も叶ふべき者か」　（御書五一四）

日如上人御指南

「そもそも、本宗における寺院とは、それぞれの地域における大法弘通の法城として建立されるもので、その意義と目的を体していくところに、その存在意義と大事な使命が存しているのであります。そして、寺院が寺院としてその用きを実証していくためには、なんと言っても大事なことは、僧俗一致・異体同心の団結であります。指導教師のもとに講頭、副講頭、幹事をはじめ、講員一同が異体同心して妙法広布に励んでいくところ、一天広布の大願も必ずかなうのであります。（中略）反対に、一人ひとりの心がバラバラでは何事もかなわないことを、大聖人様は『弁殿御消息』のなかで、『しかるになづきをくだきていのるに、いまゝでしるしのなきは、この中に心のひるがへる人の有るとをぼへ候ぞ』（御書六一）と仰せであります。『なづき』つまり、脳髄を砕くほどに祈りに祈っても、その験が顕れないのは、そのなかに『心のひるがへる人』すなわち、異体異心の者がいるからであると仰せられているのであります。まさしく**『異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事叶ふ事なし』**と仰せのように、この異体同心の団結こそ、勝利の鍵なのであります。ただし、異体同心とは、けっして単なる仲良しを言うのではなくして、講中の一人ひとりがそれぞれ性格、姿、形は異なれども、広宣流布の一点に焦点を合わせ、心を同じくして戦っていくことであります」

（大日蓮・平成二十八年六月号）